

船釣りの作法

釣技
釣技
食

其の十九
外房・大原沖のヒラメ釣り
ライトヒラメの真髄は
予測力にあり。



ヒラメの匂と言われる寒ヒラメ



▲40、50、60、80号オモリを使い分けて道糸の角度を整える。決してライト＝オモリが軽い＝だけではない

道糸が従来より細く、タックルが敏感になる「ライトヒラメ」でヒラメ釣りは何が変わったのか。その答えは、海底の変化やアタリが分かりやすくなったこと。道糸、竿、リール、それぞれが実用範囲内で細く、敏感になることで、これまで曖昧模糊としていた海底の様子やヒラメの魚信が明確になった。

現在、道糸1.5号を基本としたライトヒラメは外房、茨城、つまり日本最大のヒラメ釣りエリアにおいてスタンダードな釣りになりつつある。

その第一人者・鈴木新太郎さんが地元大原より出船した2月は、ヒラメが岸近くの水深10メートル前後の浅場にやってくる時期。北風に押されて流される船上で、鈴木さんは40号と50号のオモリを使い分け、道糸の角度を調整しながら釣っていく。

○鈴木新太郎 千葉県出身の船釣りのエキスパート。得意とするフィールドは千葉県外房から茨城県鹿島灘・常磐にまで至る。

海底の変化を察知し、その日の釣りを組み立てていく。

【オモリを置かずにリサーチする】



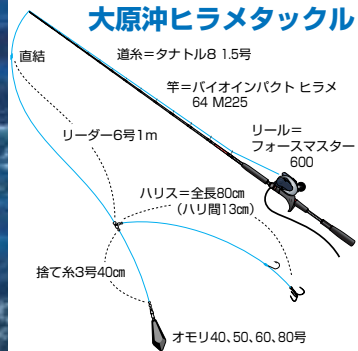
①鈴木さんのヒラメ釣りはオモリを底に着けず、海底から30センチ離れた位置で待つ。竿にオモリ負荷が加わるからこそ、魚信と根掛かりの違いが分かる



③オモリが底に着かない時は不用意に道糸を出さず、竿を大きく上げて数秒止めてから底を取り直す。この間に船が姿勢を戻すと、道糸を出すことなく底ダチが取れることが多い



②オモリを海底に着けるのは数十秒間隔で一瞬だけ。オモリを立てたまま着底させ、持ち上げるイメージ。このとき水深の変化、海底の質（砂か、岩か）などをリサーチし、展開を予想する



親バリは上アゴに、孫バリは背に打つ。尾ビレが動いている限り使い続けるのが鈴木さんの作法



親環間は13センチ。鈴木さんは素早く同じ寸法の仕掛けを正確に作ることができる



▲【探見丸スクリーン】横流しで糸が払い出す場合は数10秒後に仕掛けが到達する場所の海底の変化やベイトの反応を知ることができる。つまり、未来を知ることが可能なのが探見丸スクリーン。 ※探見丸搭載船で使用できます

タックルの作法

ヒラメ釣りに欠かせない情報力 + 電動と手巻き二刀流の可能性。

【フォースマスター600】

「海底の変化を察知し、釣りを組み立てていくうえで、フォースマスター600の探見丸スクリーンはとも役立ちます。また、手巻きでの速度と感触が非常に優れているのも特徴。ヒラメをハリ掛かりさせるまでの駆け引きや浅場などは手巻きで、深場など手巻きで足りない時はモーターを使う、二刀流ともいえる使い方。ストレスを感じないリールです（鈴木新太郎）。」
●SPEC ギア比=6.5、最大ドラッグ力=10kg、自重490g、糸巻き量PE=2号-300m、3号-200m、最大巻上長=67cm / ハンドル1回転、ハンドル長=65mm、実用巻上持久力=6kg、最大巻上速度=195m / 分、本体価格=9万5200円



▲【フッキングモード】静止、または、さそい速からワンタッチで最高速まで瞬時に加速させてフッキングさせる機能。浅場のヒラメ釣りでは手巻きでの合わせを基本としつつ、ラインの抵抗やたわみが増す深場狙いのヒラメ釣りでは有利となる



▲【NEW フォールレバー】オモリ80号相当まで対応、フォールスピードを制御する。レバーを締め込んでもハンドルに干渉しないため一度セットしたレバーを戻す必要がなく、速度も表示される

▶【中間速2段階設定】

「さそい速」は微速巻きなどに、「ファイト速」は巻き上げ時の基準となる速度に、それぞれワンタッチで到達するのが中間速2段階設定。当日、ヒラメ釣りでは「さそい速」はOFF、「ファイト速」は10で使用



▲【手巻きハイギア化&ドラッグUP】ハンドル1回転あたりの巻き上げ距離67センチのハイギア仕様。パーミング性にすぐれたタッチドライブやスピードクラッチなどの操作が片手で完結するため、もう一方の手はハンドルに集中できる。ドラッグ力は10キログラムで青物にも対応可能

▶【タッチドライブスピードロック】

タッチドライブを押している間は巻き上げが加速し、離すと減速する機能。速度は数字と同時にディスプレイ左端にタコメーターのように表示される。浅場のヒラメ釣りでは手巻きでのハンドル操作に集中するが、巻き上げ距離が長くなる深場では有効な機能になるはず、と鈴木さん



食の作法

ヒラメのお造り

～身を無駄にせず食感の違いを楽しむ～



削ぎ切り、平切り、拍子切りに、エンガワを加えてできあがり



①ヒラメをサク取りする。入念にウロコとヌルを取り、頭、内蔵、尾を外しておくと、骨付きの下身を数日間寝かせても臭みが出ない
②幅の広い部分は舌触りのよい削ぎ切りで薄く
③中間は厚みを持たせた平切りで
④尾の近くは歯応えのよい拍子切りに

変化よりも、水深が浅くなる場所ですべてつくるといふことだった。
鈴木さんはオモリでの海底リサーチと同時にフォースマスター600の探見丸スクリーンを活用、たとえイワシが暴れなくても、アタリがなくても、水深が浅くなる場所では集中し、読みどおりヒラメを掛けて見せたのであった。

多くの場合、砂地に点在する岩にさしかかる場所はチャンスとなる。同じく海藻の有無、水深の変化など、この目、どのような場所にヒラメが着いていて、アタリを出してくるのかを観察し、次の展開を予測する。
シケの合間で濁り潮と強風の中、数時間の釣りで鈴木さんがつかんだ傾向は、この日のヒラメは岩場など底質の

エサ付けやアタリから入合わせなど、ヒラメ釣りにはいくつか鍵となるテクニクがある。
その中で鈴木さんが最も大切にしていることが、「海底の変化を察知し、その日の釣りを組み立てていくこと」。
意外に思うかもしれないが、鈴木さんはヒラメ釣りでオモリを海底に置かない。トンと一瞬オモリが海底に着いたら、すぐに30センチほど上げる。
この時にオモリから伝わる感触で、海底が砂なのか、岩なのか、海藻か、カケ上がっているかなど、海底の状況を知る。



「船釣りの作法」動画公開中。
YouTube SHIMANO TV
公式チャンネルにてご視聴いただけます。